

ことばと文化の学び (2)

：「身近な語彙」に見る日英語の異同

Language and Culture Education (2)

：To Cultivate Children's Language Sensitivity through “Familiar Vocabulary”

仲 潔†・田口 梓††

NAKA Kiyoshi and TAGUCHI Azusa

1 はじめに：「言語や文化に対する理解」という壁

異言語^①を習得する際、さまざまな「壁」がある。学習者自身が就学以前の社会化／文化化の中で獲得する興味・関心や、彼らがおかれている経済的事情をはじめとした学習環境^②なども、異言語の習得にとって壁となり得る。仮に学習環境が整っている場合であっても、壁がないというわけではない。学習者の第1言語と学習言語との視点の違いや、対象物が想起させるイメージの違いもまた、壁となり得るであろう。例えば、「満月がきれいだね」を学習言語に直訳して通じることもあれば、まったく異なる意味として伝わることもある。それぞれの言語が発展してきた背景には、それが用いられている地域・集団内の文化があり、その影響が程度の差こそあれ、言語に反映される。本稿で取り上げる「壁」とは、このことである。

換言すると、本稿の議論は、異言語が持つ視点やその背後にある文化の異同について、である。例えば、「家具3点セット割引セール」といった表現がある。このような表現は、毎年春になれば、「新社会人応援セール」といった文脈で、広告や店舗のポップで見かける。「3点の家具」であるから、「家具」を数えていることになる。これに対し、英語の“furniture”は集合的に用いられ、通常、不可算名詞である。語彙の学習において典型的な「フラッシュカード」は、語彙習得の有効な手段であり得ると同時に、学習者のうちに「第1言語と対象言語との間には、1対1の関係がある」という誤った言語観を生じさせる危うさも併せ持つ。先の例で言えば、「家具=furniture」という具合である。他にも、「誰も来なかった」を英語にすれば、“No one came here.”などが考えられるが、「0人がここに来た」という日本語には違和感を覚えるだろう。同じ状況／場面を描写するのに、言語が違えば発想が異なる部分がある。もちろん、「発想」そのものは、極論で言えば、個々人によって異なるものである。ただし、「言語」は制度化されたものである。したがって、その言語が用いられる社会における文化^③が、影響を与えていると考える。

鈴木孝夫(1973)による古典的名著『ことばと文化』の言葉を借りれば、異なる言語どうしの間には、意味の「ずれ」がある。「ずれ」には、異言語間で意味が重なっている部分と、重なっていない部分がある状態を指す。前者を「異」とすれば、後者は「同」である。本稿の副題に「日英語の異同」を含めたのは、このためである。

2 考察の視座：英語科教育における「文化」について

さて、教育場面に話を移そう。中学校英語科教育^④の目標は、英語による「コミュニケーション能力の基礎を養うこと」(文部科学省2008:6)である。その目標を達成するために、「次の三つの事項を念頭に置いて指導する必要がある」(同)とされている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
 - ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
 - ③ 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
- (同 以下、下線は筆者)

2.1 「文化」に対する解釈

上述の①については、「言語の仕組み、使われている言葉の意味や働きなどが分かるようになることや、その言語の背景にある文化に対する理解を深めることが重要」(同)という補足説明がある。

教育について考える場合、「評価」の問題を避けるわけにはいかない。国立教育政策研究所による『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 外国語】』(2011)は、英語科教育の評価の在り方を提示している。同書の著作権は文部科学省にあり、半ば公的な位置づけにある。そこには、「言語についての理解」と「文化についての理解」という2つの項目が記されている。

<言語についての理解>

言語活動を行う中で、そこで用いられている強勢、イントネーション、文法事項など、英語の仕組みについての知識の有無を評価する。

<文化についての知識>

一般的な知識や百科事典のような内容ではなく、技能の運用で求められる、言語の背景にある文化に限って評価する。すなわち、理解をしていないとコミュニケーションに支障をきたすような文化的背景を評価の対象とする。

(国立教育政策研究所2011:34)

さらに、「評価対象とする『文化についての理解』」については、次のように説明されている。

コミュニケーションを円滑にするための背景的知識としての文化理解であり、この知識をもっていることにより、コミュニケーションにおいて生じやすい誤解などを最小限におさえることができる点、つまり、この知識を身に付けることでコミュニケーション能力が高まるという点に留意する必要がある。

(同：48)

これらの記述より、「文化」に対して、主として2つの解釈が考えられる。第1に、「言語についての理解」に重きを置く場合には、「言語」が構築される際に影響を与える(と信じられている)文化、である。第2に、コミュニケーションの円滑さ/ミスコミュニケーションに重きをおく場合には、言語を使用する際に影響を与える(と信じられている)文化、である。

ところで、「英語の仕組みについての知識」も評価の対象とされることが明記されているのであった。そうであれば、コミュニケーション活動を考案する際に、その想定する場面や状況に「文化」を考慮すればよい(つまり、上記「第2」の「文化」の解釈)、ということにはとどまらない。言語表現そのものが内包する文化(つまり、「第1」の「文化」の解釈)についても教授すべき、ということになる。本稿で取り上げる「文化」は、こちらの意味でのものである。

2.2 「身近な語彙」について

日英語の発想の異同は、語彙・文法(語順)などさまざまな次元で存在する。例えば、“come”と「来る」は、1対1の関係にはない。“on”も「～の上に」という理解であっては、カレンダーが壁

にかかっている状態を英語で描写し得ない。ましてや、日本語を英語の単語に逐一置き換えて、日本語の語順通りに並べ替えたところで、「通じる」ことはあっても、「文法的に正しい」とは言えない。このように、語彙にせよ文法にせよ、日本語と英語の間には、発想（現実への視点／切り口）の違いがある。

その中で、あえて「身近な語彙」、中でも「身体」と「色」を次節以降で取り上げる理由は、次の通りである。例えば、“communication”や“globalization”のように、概念そのものを理解することが困難な語彙の場合、それ自体の理解だけで壁となり得る。基本的には、「何となくわかる」／「何となく使える」状態をまずは目指し、それを深める／広げることが、「ことばと文化の学び」の狙いである（仲2013）。したがって、学習者が既に「何となく知っている」であろう「身近な語彙」を取り上げる。

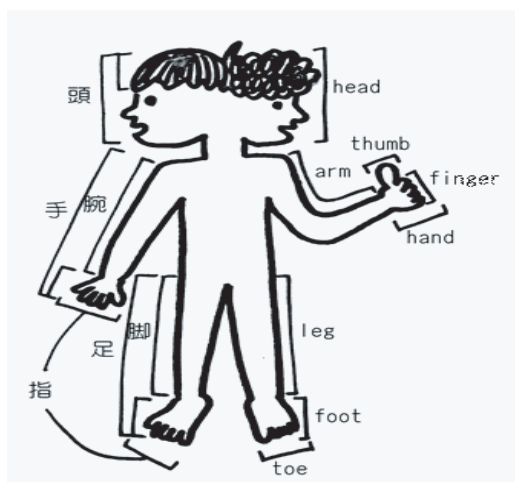
次に、「身近な語彙」そのものであるが、これが実は難しい。『学習指導要領』にも、学習者にとって身近な表現から習得させることが望ましい、とされているが、本来的に個人差が生じるものであろう。例えば、「きりん」を“giraffe”と言えるようになることが無意味であるとは思わないが、学習者にとってどれほど「身近」なのかは疑わしい。そこで、「身体」に関する語彙、および「色」に関する語彙に焦点を絞った。他にも、「ものの形状」に関する語彙や基本的な「動作」に関する語彙も考えられるが、これらについては、機を改めて整理する。

なお、学習者の英語に対する動機づけという観点からも、身近な語彙を取り上げる利点が考えられる。「知っている」はずの語彙の、意外な使い方／意味は、興味・関心を惹きつけられることが期待できる。もちろん、いたずらに難しくさせ、かえって混乱させてしまわないように、じゅうぶんに留意しなければならない。

3 「体の部位」に関する語彙

「体の部位」はそれぞれが独立しているわけではなく、境目のないものである。例えば、「肩」と「腕」は、どこまでが「肩」でどこまでが「腕」というように、はっきりとした境目があるものではない。言語によって切り取られることで、それぞれの語彙の意味範囲が決められている。

「体の部位」というのは、障害の有無などの個人差はあるものの、言語が異なっても人間に共通しているものである。ただし、その語彙が示す範囲は、日英語で異同がある。



イラスト．体の部位の意味範囲の異同

3.1 頭/headの異同

以下、第3節および第4節では、まず日英語の意味範疇の異同を図示する。次に、「異」と「同」をそれぞれ個別に整理していく。

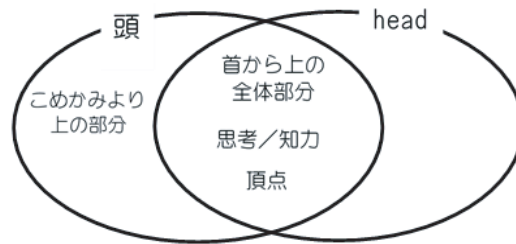


図1. 頭/headの意味範疇の異同

3.1.1 頭/headの異

日本語の「頭」は首から上の部分全体を示す。また、こめかみより上の部分を限定して示すこともある。例えば、「頭を丸める」というのは、髪の毛を剃ることである。また、「頭を抱える」とは、途方に暮れて、手で頭を覆っている様子から、悩み事や困っている事があり、どうすればよいかわからなくなっている状態である。頭を覆っているといっても、実際に触れているのは、こめかみより上の髪の毛が生えている部分である。英語では、“be tearing one’s hair out”で困惑していることを表す。英語の方は髪を掻き乱しているような表現で、実際に触れている部分を表している。

i) Wine always goes straight to my head.

(ワインだと脳天直撃で酔いやすいんですよ。)

ii) If you keep telling him how smart he is, it will go to his head!

(なんて賢い子なの、とあの子に言い続けていたら、うぬぼれちゃうよ。)

(OXFORD Practical English Dictionaryより 大意は筆者)

i) と ii) のいずれにも、“go to one’s head” という表現がある。これは、日本語の「頭にくる」のような意味とは違う。日本語の「頭にくる」とは「かっとなる」ことや「気がおかしなること」を意味するが、英語の方はそうではない。i) は「お酒に酔う」こと、ii) は「うぬぼれる」ことを表している。日英語で、頭に上るもののイメージが異なることがわかる。前者は「お酒が直接頭に効いてくる」ことから、「酔う」という意味を推測できるかもしれないが、後者はなかなか難しいであろう。

3.1.2 頭/headの同

なにかを考えると、日本語では「頭を使う」という。「頭」は身体部位のことだけではなく、その中身である「脳」も意味しているのである。同様に、英語にも“use one’s head”という表現がある。このように「頭」や“head”を使った表現には、思考や知力を表すものがある。他にも、日本語では、難しいことを熱心に考えたり、工夫して考えだそうとしたりすることを、「頭をひねる」と言う。また、心配事などのために苦しんだり悩んだりすることを、「頭を痛める」と言う。さらには、頭の働きが早く、上手に処理できることを、「頭がきれる」と言う。いずれも、考えることや知的能力に関わる表現である。英語でも、“put our heads together” (頭を寄せ合って一緒に考える) や、“have one’s head in the clouds” (現実離れしたことを想像している) といった表現がある。

「頭」は、人間の体の部位の中で一番高い場所にある。そこから、「頂点」を表すことがある。例えば、「頭の前からつま先まで」とは「一番上から一番下まで」という意味である。同様に、英語にも“from head to toe”という表現がある。また、頂点というところから、社会的地位などが一番

上であることも表す。例えば、日本語では組織のリーダーを「頭（かしら）」ということがある。英語にも同様に、“the head of the class”（クラスのリーダー）といった表現がある。

ところで、ことばの意味という問題を考える際、メタファー（隠喩, metaphor）について無視することはできない。メタファーとは、端的に言えば、ある概念を異なる概念によって表現することである。Lakoff (1980) らが、*Metaphors We Live By*という表題で端的に言い表しているように、人間は複雑な世界をわかりやすいものに置き換えることで捉えて表現し、生きている。もちろん、自らの母語においては、メタファーを意識して用いることはないであろう。ただし、異言語となれば話は別である。母語でのメタファーの発想が、異言語にも転移するからである。英語の場合、世界的に普及しているがゆえに、さまざまな言語の影響を受けて新しい表現が生み出され続けている。それに対して、「文法的に間違っている」であるとか「英語の母語話者は使わない表現である」といった理由で、学習者に一方的に是正を促すことは、ことばというものが常に変化し続け、その変化し続ける状態こそが常態であるという、社会言語的事実に反する見解である⁶⁾。

この点について、本名 (2012) をもとに、具体的に考えておこう。たとえば、上述した「頭が切れる」であるが、“He is sharp.”や“He has a sharp head.”といった表現が考えられる。前者では、“He”という人間そのものを「頭」にたとえている。そして、2つの表現のいずれもが、頭の働きのことを刃物の鋭利さに置き換えている。これらはおそらく、多くの英語使用者にとって理解可能な表現であろう。これに対し、本名も例示しているように、「あの店はおいしい」を“*That restaurant is delicious.*”と表現すれば、「間違い」であり、「通じない」とされる。“restaurant”という建造物に、“delicious”という味覚があるわけがない、という論理であろう。ところが、先の“He has a sharp head.”と同じメタファーの基盤に基づいていることに気づくであろう。つまり、「レストランという建物全体で、そこで提供される料理を指している」(同: 41) ののである(以上、本名 2012: 40-41)。ことばの変化を食い止め、画一的な表現・用法に矯正／強制しようとした言語政策は、いまだかつて完全に成功した試しがない。したがって、さまざまな言語文化の影響を受けた英語のメタファー表現を楽しむ味わうくらいの姿勢を持っておきたいところである。

3.2 首/neckの異同

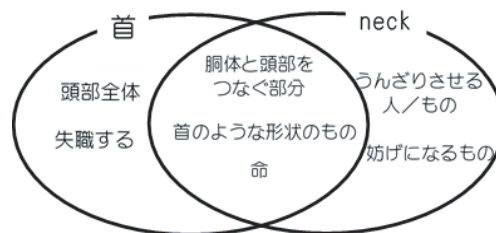


図2. 首/neckの意味範疇の異同

3.2.1 首/neckの異

人の意見に同意するときや、何かを断るときの動きを思い浮かべてほしい。日本語では、それぞれを「首を縦に振る」や「首を横に振る」という。英語では、“nod one's head”と“shake one's head”という。日本語の表現では、「首」を用いているが、実際に動いているのは頭部である。つまり、「首」は胴体と頭部をつなぐ部分を限定的に示すだけでなく、全体的にその上にある頭部も示すことがある。

これに対して英語の“neck”は、胴体と頭部をつなぐ部分のみを表す。また、日本語で「首を突っ込む」といえば、関心をもってそのことに参加するという意味であるが、英語では、“stick one's nose into something”という。「首を突っ込む」は、興味に引かれて頭が前に出て、そのことに向

かっていき、頭から先に入っていくようなイメージである。これも「首」が頭部を表している例である。「首」が「頭」より先に入るとは、ありえないからだ。英語では“nose”という単語を用いているのは、一番突き出ている部分である鼻がはじめに入っていく部分だからであろう。

首を寝違えたときの痛みを経験したことはないだろうか。首の痛みとは、煩わしいものである。このような考え方から、英語で“a pain in the neck”とは、「首の痛み」であるが、「やっかいなこと」や「うんざりさせる人」を意味する。

日本語で「首」、とくにカタカナ表記の「クビ」は失職することを想起させるだろう。「首を切る」や「首が飛ぶ」は、解雇したり、されたりすることを意味している。これは、実際に処刑で首を切られていたことや、日本の伝統芸能のひとつである（とされる）人形浄瑠璃で、芝居が終わると人形の首が外されることに由来している。

3.2.2 首/neckの同

首/neckは体の部位を表すだけではなく、物における「首」のような形状になっている部分も表すことがある。「ビンの首」ということがあるが、これはビンをもとに人の胴体と見立てると細くなっている部分が、ちょうど「首」に相当すると捉えるためである。英語でも同様に、“the neck of bottle”という。なお、“bottleneck”とは、ビンの首を意味するだけではなく、ビンの上部が細くなっている形状であることから、「工事などで狭くなっている道」や「妨げになるもの」を意味する。日本でも「引っ込み思案なところがネックだな」などということがある。この表現は“bottleneck”に由来しており、「ネック」が、何かをするとき支障をきたすものであることを意味している。

また「首を賭ける」といえば、命や職を失う覚悟で何かに取り組むことである。英語では“risk one's neck”で、「首を危険にさらす」ことで、「危険を冒す」ことを表す。つまり、日英語ともに首/neckは命を象徴するものである。首は人間の急所であるためだろう。

3.3 手・腕/hand・armの異同

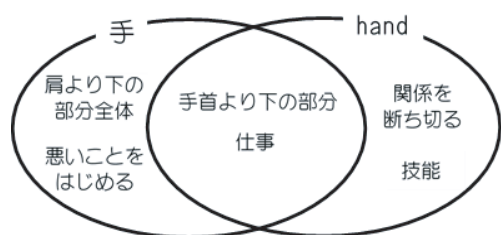


図3. 手/handの意味範疇の異同

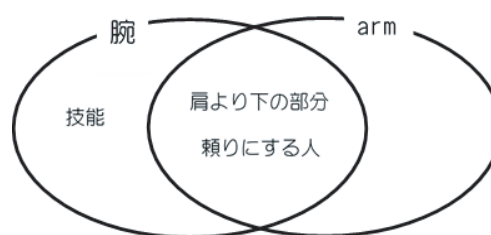


図4. 腕/armの意味範疇の異同

3.3.1 手・腕/hand・armの異

ラジオ体操は、「腕を前から上に挙げて、大きく背伸びの運動から」という掛け声のもとではじまる。英語版のラジオ体操⁶⁾では、その掛け声は“Raise your arms and stretch your back”である。ここでは、「腕=arms」である。ところが、続く「手足の運動」の掛け声の英訳は、“Swing arms with light squats”である。「手=hand」だと思っていると、違和感を覚えるかもしれない。この掛け声に合わせて行われる運動は、足を曲げ伸ばしながら、肩より下の部分、つまり腕を左右に開いている。日本語の「手」は限定的に「手首より下の部分」を示すだけではなく、全体的に「肩より下の部分」も示すことがある。これに対し、“hand”は「手首より下の部分」だけを示す。つまり、「手」は“hand”と比べ、意味範疇が広いといえる。

日本語で何か悪いことを始めるときには、悪事に「手を染める」という。染め物をするとすぐに手

が汚れる、ということに由来しているのだろう。しかしながら、悪いことをやめるとき、日本語では「足を洗う」という。「手」を染めたのに、洗うのは「足」である。これは、それぞれの慣用句のルーツが異なるからである。「足を洗う」というのは、一日の田畑の仕事が終わると、泥のついた足を洗うことに由来していると考えられる。一方、英語では、“wash one's hands of~”で「~と手を切る」ことを表している。これは、日本語の「足を洗う」と同様に関係を断ち切ることを表しており、日英語の表現上で「足」を洗うのか、“hand”を洗うのかという違いがあることがわかる。

次に、腕/armについて考えてみよう。日本語では「腕前」や「腕がいい」などという表現があり、この場合の「腕」は、人が身につけている技能を表す。また、「手に職をつける」という表現もある。技能を身につけるのは「手」であるが、その後の状態は「腕」なのである。これに対し英語では、「腕前を試す」ことを“try one's hand at ~”という。また、なにかのベテランのことを“an old hand at~”という。“arm”を用いたこのような例は見られなかったが、“arm”は“weapon”という意味で使われることもある点で異なる。

3.3.2 手・腕/hand・armの同

「手」は限定的に、「手首から下の部分」を示す。この点では、“hand”の意味範疇と共通している。また、腕/armは、いずれも「肩から手首までの間の部分」を示し、意味範疇が同じである。

日本語で、人を助けることを「手を貸す」というが、英語にも“lend a hand”という表現があり、同様の意味を表す。また、対処しなければならない問題が多く、他のことをする余裕がないことを「手いっぱい」という。文字どおり、すべきことや問題で手がいっぱいになっていて、他にはもう何もできないことを意味する。英語でも“have one's hands full”で同様の意味を表すことができる。手/handは、「仕事」をする部位である点で共通している。

ドラマ等を見ていると、「こいつは俺の右腕だ」というセリフを耳にしたことがあるだろう。日本語では、頼りにしている人のことを、このように「右腕」ということがある。日本人の多くは、右腕が利き腕であることが多い。このことから、「右腕」とは、利き腕のように仕事をするのに大切な存在であることを意味するようになったと考えられる。

英語では“one's right arm/hand”で、「なくてはならない人」を表す。例えば、“give one's right hand”で、「どんなことでもする、犠牲をいとわない」ことを意味する。これらは“right”が日本語で「右」だけでなく「正しい」という意味にも訳されることから推測できるだろう。里中(2010:146)によると、「古代ローマでは、『人体の右側には神が宿っている』と信じられていた。そのため、「神の前に進み出るときは、神の宿る右足から出すことに決められ」、「やがて、公共の建物に入る時には、『正しく右足から入ったかどうか』をチェックする門番まで立つようになった」(同)という。ここから、“right”は「正しい」を意味するようになり、“one's right arm”が上記のような意味になったと考えられる。

3.4 指/fingerの異同

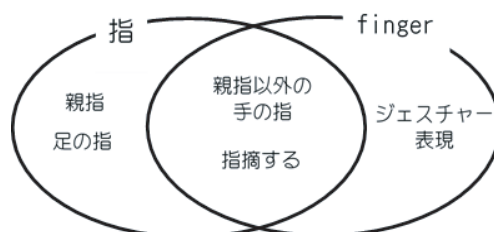


図5. 指/fingerの意味範疇の異同

3.4.1 指／fingerの異

日本語で「指」といえば、両手の10本の指と両足の10本の指、つまり合計20本の指のことである。ところが、“finger”は、親指以外の手の指のことを意味することがある。つまり両手合わせて8本の指ということになる。「親指」には、“thumb”という語が対応している。なお、「足の指」の場合は“toe”である。このように、“finger”は「指」と比べて意味範疇が狭いことがある。また、日本語で手の指はそれぞれ、「親指」／「人さし指」／「中指」／「薬指」／「小指」というが、英語ではそれぞれ、“the thumb”／“the forefinger”／“the middle finger”／“the third finger”／“the little finger”という。「中指」や「小指」の表現は日英語ともに同じような発想だが、その他の指については日英語にずれがある。

他にも、幸運を祈ることを英語では“keep one's fingers crossed”という。これは指のジェスチャーに由来する表現である。中指を人差し指の上に重ねて曲げた形が十字架に見え、幸運をもたらすという考え方に由来しているそうである。基本的には、「魔よけや願いごとのしぐさ」(本名2013:50)である。ただし、“cross one's finger”という表現が、実際にどのような意味を持つのかについては、コンテキストに依存する点には留意すべきであろう。本名(同)によれば、“Good luck!”や“We're close friends.”、あるいは“I'm joking / deceiving / lying. などの意味になるという。

どの意味かは、このジェスチャーのコンテキストによります。Please keep your fingers crossed that I pass the entrance exam.では、「祈ってください」の意味でしょう。また、She crossed her fingers behind her back.のように、行為者がこのジェスチャーを相手の背後でして、しかも第三者に向けたものなら、「今のはジョーダン」とか「今のはウソ」の意味になります。(同)

英語には、他にもジェスチャーがそのまま表現に表れているものがある。例えば、“put two fingers up to someone”は「人を軽蔑する」ことを表している。これは中指と人差し指を伸ばし、相手に手の甲を向けて、下から突き上げるようにして示すしぐさが軽蔑を表すことに由来している。なお、言うまでもなく、ジェスチャーもまた文化によって異なる意味を持ち得る。場合によっては、他者を侮辱する意味になるなど、深刻なミスコミュニケーションをもたらしてしまう。したがって、授業に取り入れるのであれば、じゅうぶんに留意しておきたい。また、文化差に加えて、上述したようなコンテキストに依存する性質も併せ持つことも考慮しておくべきであろう。

3.4.2 指／fingerの同

日本語で、「指摘する」は指でさし示すことから、問題となることを取り上げて示すことを表している。英語でも“put one's finger on”で同様の意味を表す。日英語ともに、「何かを示すときには指をつかう」ことから生まれた表現である。

ところで、先に「“finger”は、親指以外の手の指のことを意味することがある」と述べた。「ことがある」わけだから、「そうではないこともある」ということである。これは、「中指」を“the middle finger”と表現することからも、想像がつくだらう。“middle”になるためには、“thumb”も“finger”として認識しなければならないからだ。ここで、英語の幼児向けの指遊び歌(*The Finger Family*)を紹介しておこう。

Daddy finger, daddy finger, where are you?
Here, I am, here I am. How do you do?
Mommy finger, mommy finger, where are you?

Here, I am, here I am. How do you do?
 Brother finger, brother finger, where are you?
 Here, I am, here I am. How do you do?
 Sister finger, sister finger, where are you?
 Here, I am, here I am. How do you do?
 Baby finger, baby finger, where are you?
 Here, I am, here I am. How do you do?

上記の歌詞から、「指」と“finger”の「同」だけではなく、さらなる「異」にも気づくであろう。それは、日本語の「親指」が“daddy finger”と対応している点である。つまり、「異」でとりあげたような“thumb”のように、“finger”に含まないこともあれば、“daddy finger”のように“finger”と表現することもある。このように、日英語の「異」と「同」は、必ずしも明確な違いがあるというわけではなく、あくまでも分析／整理上の分類であることに留意しておきたい。

4 「色」に関する語彙

雨あがりの空に架かる虹は、いくつのものでできているだろうか。日本語を母語とする人であれば、その虹をみて、「7色」とこたえるであろう。赤・橙・黄・緑・青・藍・紫である。同じ質問を、英語を母語とするアメリカ人に行ってみると、red・orange・yellow・green・blue・purpleの6色、とこたえるかもしれない⁷⁾。他にも、虹の色を2色であるとか、3色であると言う文化もある。全く同じ虹を見ている、このように色の捉え方に違いがあるのだ。虹は、外側は赤から始まり、内側にかけて紫になるというグラデーションになっており、はっきりとした境界線がない。つまり、虹の色を数えるということは、境界線のない連続体に、言語によって境界線を入れるということである。境目のない連続体をどのように区切るかは、言語によって異なる。言い換えると、言語によって色の認識の仕方は異なる。本節では、日英語の「色」の異同を整理していこう。

言語名	数
日本語	7
日本語（古事記）	4（青，赤，白，黒）
韓国語	7
フランス語	7
英語	6（民衆レベル） 7（科学レベル）
ドイツ語	5（Rot, Gelb, Grün, Blau, Violet）
ショナ語（Shona）ジンバブエに住むソト族の言語。	3
バサ語	2

表. 虹の色の数⁷⁾

4.1 青/blue

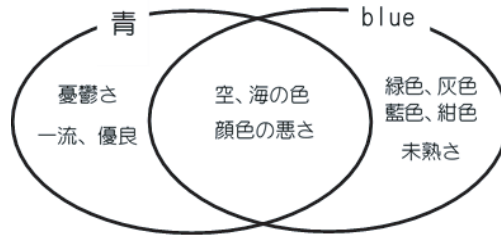


図6. 青/blueの意味範疇の異同

4.1.1 青/blueの異

日本語の「青」色の意味範疇は，“blue”のそれと比べると広い。例えば、「青信号」／「青葉」／「青物」／「青い山脈」は、すべて「緑」色のものを「青」で表している。また、「青ヒゲ」／「青馬」は、「灰」色であるが「青」で表されている。他にも「藍」色や「紺」色も、「青」に含まれる。これらは、かつての日本語において、色が4つに大別されていたことに由来する。その4色とは、アカ（明）・クロ（暗）・シロ（顕）・アオ（漠）である。「アオ」とは、はっきりとしない色を表していた。そのため、「緑」や「灰色」などの曖昧な色が「青」で表現されているのかもしれない。

「青二才」／「青僧」／「青くさい」などは年齢が若く、経験不足であるという意味である。これらの例からわかるように、「青」は未熟さを表す。その由来は、植物の新芽が緑色であることにある。緑色ではあるが、上述したように、古くは「青」と「緑」とを区別していなかったため、「青」で未熟さを表すようになったと考えられる。関ジャニ∞というグループの『あおっぱな』⁽⁸⁾という曲があるが、この曲の歌詞に繰り返し出てくる「青春」／「あおっぱな」という表現も理解できよう。

iii) I feel blue every time I think of tomorrow.

(明日のことを考えるたびに、憂うつになる。)

iv) The rotten weather made it a really blue Monday.

(いやな天気のおかげで、全く憂うつな月曜日だった。)

(『英語発想IMAGE辞典』より)

英語の“blue”には、iii)のように「憂うつ」という意味がある。日本語においても、「今日はブルーな気持ちだ」という表現で定着している。同様に、“a blue Monday”には、休み明けの月曜日は仕事や勉強をしたくないという気持ちが表れている。また、“blues”とはスローテンポな悲しい音楽である。これらの例から、“blue”は憂うつさや悲しさを表すことがわかる。このような、英語の“blue”が持つ意味範疇の一部は、日本語の中に取り入れられている。この場合、「青」に置き換えられるのではなく、「ブルー」というカタカナ語で用いられている。

もちろん、日本語に定着していない“blue”の側面もある。例えば、英語の“blue”には良い意味もある。“a blue blood”とは「貴族生まれ」という意味である。また“blue ribbon”は「最高名誉賞」のことである。これらから“blue”には「一流であること」／「優良」といった意味もあることがわかる。

4.1.2 青/blueの同

青色の表すものとして、「澄み切った空」／「晴天の日の海」の色などが代表的であろう。それぞれ、「青空」／「青い海」といわれる。これらについては、英語の“blue”と共通している。例えば、

「青空」は“a blue sky”で、「青い海」は“a blue sea”である。他には、晴れ渡った空から雷が落ちることから、予想外のことが突然起こるということを意味する「青天の霹靂」を、英語では“a bolt out of the blue”と表現する。

何かに不安を感じて顔色が悪いとき、日本語では、顔が「青ざめる」という。これは血の気のないことを表している。英語でも“turn blue”で同様の意味を表す。

4.2 緑/greenの異同

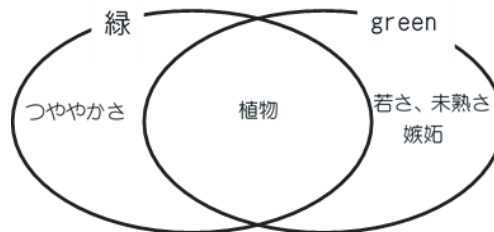


図7. 緑/greenの意味範疇の異同

4.2.1 緑/greenの異

「緑の黒髪」とは、女性をつやのある黒い髪のことである。これは新芽のように、若々しくつややかな髪の色であるということである。日本語の「緑」は色だけではなく、その色が植物の新芽の色を表すことから、つややかさも表すようになったと考えられる。

英語の“a green old age”は「年をとっても元気な人」を表している。若々しい人であるということである。また、“a greenhorn”や“green boy”は「未熟者」を表し、日本語の「青二才」に当たる表現である。つまり“green”は、植物の新芽の色であることから、新鮮なものとして「若さ」を表し、若いということから「未熟」であるということを表すようである。

他にも、“have a green thumb” / “have green fingers” という表現がある。これらを直訳すれば、「緑色の親指を持っている」 / 「緑色の指を持っている」となるが、実際には「園芸の才能があること、得意であること」を意味する。マノラ (2010) によると、このような表現は植物を大切に育てているうちに、自然と世話をしている人の指に植物の色が移っていくという考え方に由来しているという (同:15)。

また、“green light”は「青信号」で、“green apple”は「青りんご」である。これらは、日本語で「青」で表すものが、英語では“green”で表される例である。日本語では「青」で「緑」色のものを表すこともあるが、英語では、“blue”と“green”は区別されている。

さらに、英語の“green”は、嫉妬心やねたみを表すことがある。“green with envy”は、嫉妬心で顔が緑色になることから「妬みで、顔が青ざめる」様子を表している。同様の意味を表すものに、Shakespeareの*Othello*に登場する“the green-eyed monster”という表現がある (市河ら1964:71)。直訳すると「緑色の目の怪物」である。同作品には、「嫉妬心は緑の目をした怪物である」というセリフがある。*Othello*は嫉妬の劇である。自分より先に昇進した者に対する嫉妬心や、浮気をしているかもしれない妻への嫉妬心、好きだった人を取られてしまった嫉妬心など、さまざまな嫉妬心が入り混じっている劇である。ここから“green-eyed”で「うらやましがる」ことを表すようになった。日本のタレントであるSMAPというグループの曲に、『青いイナズマ[®]』というものがある。この曲の歌詞は嫉妬心を描いたものであるが、ここで言う「青い」は“green”の意味範疇に属すと考えられる。

“green”の意外な意味として、もう1つ挙げておこう。“green stuff”や“green money”，

“long green” といった表現は、すべて「お金」のことを表す。これは、米国のドル紙幣が、緑色であることに由来する（倉田2011：189）。単に，“the green” とすることもある。そこから，“show someone the green” で、「(人)にお金を見せる」ではなく「誠意を見せる」という意味合いでも使われるようである。

4.2.2 緑／greenの同

日本語の「緑」といえば、自然や植物、緑色をした野菜などを想像するのではないだろうか。例えば、「部屋に緑がほしいな」といえば、「部屋になにか観葉植物を置きたい」という意味である。この表現からわかるように、「緑＝植物」である。他にも、昭和天皇の誕生日の「みどりの日」もそうである。「みどりの日」の名前の由来は、昭和天皇が海洋生物や植物を研究しており、植物を大切にしていたことにある。一方、英語ではどうだろうか。“greenhouse” は、植物を育てるために温度を保っている「温室」を意味する。「緑色の家」ではなく、「植物の家」を表しているのだ。このようなことから、緑／greenはともに、「植物」を連想させると言える。

4.3 赤／redの異同

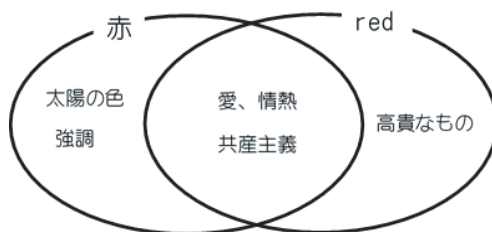


図 8. 赤／redの意味範疇の異同

4.3.1 赤／redの異

日本人の子どもが絵を描くとき、太陽は「赤」色で描くことが多いであろう。太陽の色は、日本では「赤」と認識されることが多い。例えば、「真っ赤な太陽」とは言うが、「真っ黄な太陽」とは言わない。「日の丸」の旗も、太陽をかたどった丸は赤色である。他には、運動会でよく聞く『ゴーゴー（運動会の歌）⁽¹⁰⁾』という曲の歌詞である。赤組と白組に分かれて歌うのだが、赤組のパートには、「ぼくらはかがやく、たいようのように」という歌詞がある。ここからも、「赤」が太陽を象徴していることがわかる。

しかし、英語圏では、太陽は“yellow”と認識されることが多い。子どもたちの絵の中の太陽も“yellow”で描かれている。子ども向けのThe Colors Song⁽¹¹⁾という曲には、“the big round sun is yellow”という歌詞が出てくる。同様に、「太陽が照りつける空」は、“yellow sky”である（倉田2011：189）。ところが、「日の入り／日の出はそれぞれred sunrise / sunset」(同)なので留意したい。ちなみに、英国の核による水素爆弾は、“Yellow Sun”であった。

「赤」は、『新明解国語辞典（第六版）』によると、それ以外の何者でもないことを表す。例えば、「赤の他人」、「真っ赤な嘘」は、「何のかかわりもない人」、「はっきりとわかる嘘」を意味している。日本語の「赤」は「強調」を表すことがある。「他人」というだけで、「かかわりのない人」を表すことができるのに、「赤」をつけることでさらに「全くかかわりのない人」と、強調しているのである。

次に“red”に特徴的なものをみていこう。テレビ番組などでレッドカーペットの上を歩く著名人を見ることがある。“red carpet”は「高位高官が歩く敷物」である。また、“give someone the red-carpet treatment”で「最高のおもてなしをする」ことを表している。“red”は、高貴なものを象

徴していることがわかる。日本語では、「深紅の優勝旗」といった表現など、一部では意味範疇が共通しているが、必ずしも高貴なものを象徴するわけではないようである。例えば、「深紅の優勝旗」は、実際に深い赤色のこともあれば、紫色のこともある。聖徳太子による冠位十二階では、もっとも高貴な「大徳」が紫色であり、上から5番目とされる「大礼」が赤色であった。

4.3.2 赤/redの同

赤/redは、愛や情熱の象徴とされる。Taylor Swiftの*Red*の歌詞を、日本語との対比が分かりやすいように、「直訳」とともに見てみよう。

Losing him was blue like I'd never known
 Missing him was dark grey all alone
 Forgetting him was like trying to know somebody you've never met
 But loving him was red
 Loving him was red

(彼を失うことは、今までに見たことのないブルーのようだった。
 彼を恋しく思うことは、深いグレーの中にひとりであるよう。
 彼を忘れることは知らない誰かを知ろうとするようだった。
 でも彼を愛することはレッドだった。
 彼を愛することはレッドだった。)

(Taylor Swift *Red* 直訳は筆者)

この曲では、恋愛中の女性の気持ちが色で表されている。男性との別れが、今まで見たことのない“blue”であったということから、どれほど落ち込んでいたのかということが表現されている。男性を恋しく思うときは、“dark grey”とされている。“grey”は、雲に覆われた空の色を表すので、女性の気持ちも曇り空のように晴れないということであろう。そして、男性を愛することは、“red”で表されている。これは、男性を愛することは確かな愛であったことを表している。ここからも、“red”が愛の象徴であることがわかる。

一方、日本語でも「赤」は愛や情熱の象徴である。「情熱の赤」というフレーズを、商品のキャッチコピーなどで見かけたことがあるかもしれない。BLUE HEARTS というロックグループの代表曲の1つに、『情熱の薔薇』というものがある⁽¹²⁾。その歌詞には、「情熱の真っ赤な薔薇を胸に咲かせよう」とある。

また、赤/redは「危険」を表すこともある。例えば、“red alert”は、危険を知らせるものを意味している。“red card”は、サッカーの試合でも見かけるように、ルールに違反した選手に対して出される厳重な注意である。他にも、日英語ともにred light/赤信号は、横断歩道を渡るには危険であることを警告している。なお、赤/redは「共産主義」を象徴する色でもある。これはフランス革命において赤旗が使われたことに由来している。その他、「赤字」は“the red ink”（ちなみに、「黒字」は“the black ink”）であり、同じである。その由来は、「借方には赤字を使う簿記 (book-keeping) の記載方法に」(倉田2011: 190) がある。

4.4 黄/yellow

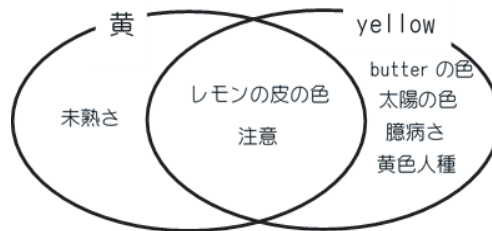


図9. 黄/yellowの意味範疇の異同

4.4.1 黄/yellowの異

英語で「黄あげはちょう」を“butterfly”，「きんぼうげ⁽¹³⁾」を“buttercup” というように，“butter”は“yellow”の代表的な色であるといえる。また，“yellow”は「臆病」なことを表す。“a yellow dog”や“a yellow belly”は「臆病者」を意味する。

アジア地域の人々の肌の色は“yellow”で表され、アジア地域の人々自体も表す。日本語でも「黄色人種」というが、これは英語の表現をそのまま翻訳したからであろう。日本人からすれば、自分の肌の色が黄色だとは思えないだろうが、英語では日本人の肌の色は“yellow”として区別されたのである。日本語では、日本人の肌の色は「うすだいたい色」として認識されている。

シンガポールを代表するシンガーソングライターであるDick Leeは、1989年に*The Mad Chinaman*という曲を発表した。その歌詞には、“Now you know what it's like to be a banana”という1節がある。「バナナ」は、外側が黄色で内側は白い食べ物である。当時のシンガポールの情勢を考慮すれば、急速な欧米化（とりわけ、英語中心による政策）から、自らの「肌の色」とは裏腹に、内面が欧米化されていく様を表現している。村野井（2006）によれば、「中国系シンガポール人である自分の言葉や外見の西洋化（アメリカ化）と自分の内なる東洋的なものがぶつかってアイデンティティが揺らぐ心情を表現」したものであり、「ネイティブ・スピーカーを目指して英語学習を推し進める先に、何が待っているかを暗示している」（同：179）という。

さて、日本語の「黄色」は「くちばしが黄色い」という表現があるように、「未熟さ」を表す。これは、鳥類のひなのくちばしが黄色いことに由来している。

4.4.2 黄/yellowの同

日本語の「黄」も英語の“yellow”もともに、「レモンの皮の色」として認識されている。ただし、「レモン」／“lemon”が想起させるイメージがあまりにも違う点には留意したい。

レモンは、英語の俗語では良いイメージはなく、つまらないもの、不良品という意味で使われる。例えば、“This car is a lemon.”（この車は不良品だよ）という。レモンのさわやかなイメージを使ったコマーシャルが流れる日本とは全く逆といっていいだろう。

（青木1999: 121）

日本には、芸能人がレモンを片手に持って笑顔で表紙を飾る雑誌があるが、英語圏の方には「この雑誌は不良品である」ことを宣言しているように捉えられるかもしれない。

黄/yellowは「注意」を喚起する色である点で共通している。“yellow card”はサッカーで選手のプレーがよくない場合に出されるものだ。信号機の黄/yellowも「注意」を表している。また、日本では、工事現場の立て看板や柵は黄色であることが多い。黄/yellowともにその鮮やかな色が

目立つため、(赤色ほどではないが) 注意を喚起する際に用いられるのだと考えられる。

4.5 ピンク/pinkの異同

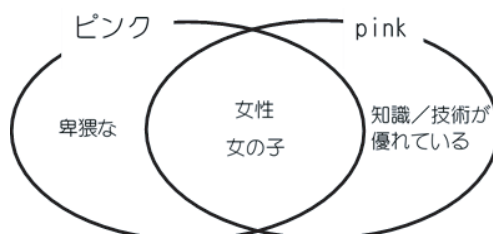


図10. ピンク/pinkの意味範疇の異同

4.5.1 ピンク/pinkの異

日本語の「ピンク」は、卑猥さやエロスを想起させることがある。例えば、「ピンク映画」や「ピンクのネオン街」などという表現である。これは、「ピンク」が「桃色」に相当する色であることが関係しているのであろう。「桃色」は、高橋真梨子の『桃色の吐息⁽¹⁴⁾』や、松浦亜弥の『桃色片想い⁽¹⁵⁾』といった曲名にもあるように、男女の恋愛を表す。また、「桃」は女性の生殖のシンボルとされる。そのため、「桃色」の意味が日本語のカタカナ語である「ピンク」に付け加えられ、卑猥なものをイメージさせるようになったのであろう。

英語の“pink”には、基本的にはそのような意味はない(ホモセクシャルを想起させることはある)。いわゆる「ピンク映画」は、英語では“blue films”であり、“blue”が卑猥なものを連想させる。英語の“pink”は、“be in the pink”で「健康である」ことを表すように、健全な状態を暗示する色である。また、“the pink of politeness”で「礼儀正しさの見本」を表すように、なにかしらの専門知識や技術が優れていることを表すことができる。

4.5.2 ピンク/pinkの同

“pink collar”は「女性向きの、事務職の」という意味で、“blue collar”(労働者)や“white collar worker”(サラリーマン)に対抗して生まれた表現である。“pink”は女性を象徴する色であるとされる。また、英語圏では、女の赤ちゃんに対しては“pink”の服を、男の赤ちゃんに対しては“blue”の服を贈るようである。日本でも、赤ちゃんへの贈り物は、女の子であるならば相対的にピンクが選ばれることが多いだろう。かつて、「ピンクレディー」というグループが一世を風靡したことからも、カタカナ語の「ピンク」も女性や女の子をイメージさせる色であると言えよう⁽¹⁶⁾。

5 おわりに：ことばの背後にある文化とコミュニケーション能力の育成

レストランでのディナーや飛行機での機内食で、「鶏肉か牛肉か(“Chicken or beef?”)」と尋ねられたことがあるだろう。この場合、日本語の感覚では「わたしは、鶏です」となるが、これを英語にそのまま置き換えて、“I am chicken.”と答えてしまえば、「私は臆病者だ」という意味として相手に伝わってしまう。この場合、日本語の「わたしは、～だ」の「わたし」には、例えば「わたしが食べたいもの」のように、言葉以上の意味が込められている。これに対し、英語の“I am ~”の“I”はあくまでも話し手個人を意味し、“I am”で自らを名乗ったり、自らの状況を表現したりすることになる。他にも、日本語で「退屈だな」と言う場合、「退屈」なのは「わたし」自身であるが、この感覚のまま英語にして、“I am boring.”としてしまえば、思うような意図を伝えられない。

“I am bored.”が「正しい」表現なのだが、英語では“bored”の感覚が自らの内側から生じるというよりは、自己以外からの影響を受ける(＝受動態)というイメージで言語化される。

また、日本語で「口の中に銀のスプーンを含んで生まれてくる」といっても、何のことなのかかわからないだろう。ところが、英語で“born with a silver spoon in one's mouth”と言えば、「幸運を持って生まれる」という意味になる。この場合、“silver spoon”が持つ、文化に根差した意味を理解していなければ、相手の言いたいことを理解できない。「一か八かやってみる」を“try to do something whether one or two”のように直訳しても、「ゴマをする」を“apple-polishing”(あるいは、その逆に「リンゴを磨く」)のように逐語訳をしても、その真意を互いが理解することはない。

このように、文法や語彙などさまざまなレベルにおいて、ことばは文化に根差している。そのため、ことばの背後にある文化に対する理解がなければ、いわゆる4技能がいくら向上しても、必ずしも他者とのコミュニケーションが円滑になるわけではない。

英語をコミュニケーションのツールとして使用する際、英語の非母語話者である者が、上述したような表現を進んで用いる必要はない。いわゆる「4技能」は、受信能力(「リスニング」と「リーディング」)と、発信能力(「スピーキング」と「ライティング」)に分けて考えることができる。他者とのコミュニケーションにおいて、「受信」に関しては、こちら側に表現の選択権がない。そのため、相手の発する情報に対して、理解／解釈できる準備をするべき、ということになる。これに対して「発信」に関しては、こちら側に語彙も文法も選択権がある。したがって、過度に難解な表現を求めて伝えたい意図が不正確にしか伝わらないよりも、可能な限り平易で分かりやすい表現をするべき、ということになる。もちろん、「受信」能力をいくら高めるといっても、限界がある。その場合には、相手に分かりやすく言い換えるよう、あるいは説明するよう要求すればいい。また、こちら側が母語の文化に影響されてうまく伝わらなかった場合や、「日本独特の文化」を説明する際には、分かりやすく伝えてあげるのが、親切であろう。

語彙や文法の背景にある文化は奥が深い。それゆえに、授業において取り入れすぎると、学習者がかえって混乱したり、英語自体に「難しい」という印象を持ってしまったりしかねない。同時に、日本語とは異なる英語の表現に「なぜ」という疑問を持つ学習者に対して、あるいは「実用的な英語」に興味を持たない学習者にとっては、英語への興味・関心を喚起し得る側面もある。また、ここで述べたような「深い理解」がなければ、簡単な英語さえ的確に表現できない場合もある。学習者のより深い英語学習や、本当に「使える」英語を教授するなど、さまざまなレベルで、「日英語の異同」が役立つのではないかと考える。

【注】

† 岐阜大学教育学部准教授。

†† 岐阜大学教育学部。

- (1) 本稿での議論は、日本の英語科教育を念頭においている。そのため、学習者の多数派の言語である日本語と、学習対象言語である英語に焦点を絞って論じている。もちろん、日本語や英語に限らず、本稿で取り上げられるような「異同」は、どのような言語であっても存在する。
- (2) 学習者のおかれた環境によっては、「学校どころではない」者もいる。また、日本社会における多数派の言語である「日本語」の習得が深刻で、「英語どころではない」者もいる。本来、英語科教育について議論するのであれば、このような諸々の問題を無視すべきではないことは承知している。これらについて論じるのは、異なる作業を伴うため、例えば、仲(2009)や仲(2012)を参照願いたい。
- (3) 文化も、言語と同様に制度化されたものである。ベネディクト・アンダーソン(1997)が指摘したように、あらゆる共同体は「想像」されたものである。「文化」や「言語」を考える場合、何らかの共同体との結びつきを前提とする。例えば、「民族文化」や「民族言語」などである。この場合の「民族」も同様に、想像され

たものである。民族の境界線があらかじめ用意されているのではなく、紛争などの政治的事情により、異なる民族として立ち現れるがゆえに、民族の境界線が認識されるのである。その意味において、「文化」や「言語」も想像／創造されたものである。ただし、それらが虚構であるとしても、その虚構がなければ現実が機能しないという側面も考慮しなければならない (cf. 小坂井2002)。本稿で言うところの「文化」や「言語」は、このように考えれば、少なくとも部分的には虚構である。ただし、その虚構によって、多くの人びとは異文化／異言語を学習し得る。これらを、本稿での議論の前提的な認識とする。

(4) 本稿で念頭においているのは、主として日本の中学校英語科教育、および小学校外国語活動である。

(5) 「ことばは変化し続けることが、常態である」ことを理解するには、「ことばの乱れ」という世論について考えてみればよい。例えば、鈴木 (2003) は次のような文章を引用している。

現代の私たちが、毎日の社会生活の上で、言葉をどういふに話し、どういふに書いて生活しているのか、その事実を観察してみると、そこには、かなりひどい混乱がある。現代の日本人の言語生活は、ひどく混乱している。こういう声がしばしば聞かれる。そして、その観察が必ずしも誤りでないことは、だれしも認めないわけにはいかない。

一読すれば、比較的最近の社説なのではないか、という印象を与えるかもしれない。ところが、上記の引用は、1951年の鈴木久晴による「現代の言語生活: その混乱と問題」『国語教育講座』第1巻からのものである。つまり、60年以上も前の話である。同様に、吉田兼好の『徒然草』には、次のような文章がある。

何事も、古き世のみぞ慕はしき、今様はむげに卑しくこそ、なりゆくめれ、(中略) 文のことばなどぞ、昔の反古どもはいみじき、ただ言うことばも、くちをしうこそなりもてゆくなれ、いにしへは、車もたげよ、火かかげよ、とこそ言ひしを、今様の人、もてあげよ、かきあげよ、と言ふ… (中略) くちをしどぞ、古き人はおほせられし (第22段)

このように、ことばは常に変化し続けるという社会言語的事実を無視した言語論には、留意しなければならない。とりわけ英語の場合、その普及地域の広範さや使用者数の多さから、これまでの他のどの言語よりも、急速に変化する可能性があると考えられる。

(6) NHKテレビによる。なお、同局が公開しているラジオ体操の図解によれば、「手足の運動」の箇所は、「腕を振ってあしをまげのぼす運動」とされている。このことから、「手足の運動」の「手」は「腕」のことであることが分かる。図解については、http://pid.nhk.or.jp/event/taisou/img/radiotaisou1_2.pdfを参照。

(7) 「虹」に相当する英語は、“rainbow”であるが、これは、“rain” + “bow”，つまり、「雨の弓」を表している。英語以外の言語については次の通りである。

言語名	言い方	意味
フランス語	ラルカンシェル (Le Arc-en-ciel) アール・コン・スイエル (Arc-en-ciel)	空のアーチ、空の弧、空の門 arc=弓、アーチ・ciel=天空
ドイツ語	レーゲンボーゲン (Regenbogen)	ragen=雨・bogen=弓
イタリア語	アルコバレーノ (arcobaleno)	arco=弓、baleno=稲妻、きらめき
スペイン語	アルコイリス (arco iris)	arco=弓、iris=虹の女神、虹色
中国語	ツァイホン (彩虹)	

(7) 英語圏での虹の色の覚え方に、“Read Out Your Good Book in Verse” というものがある。頭文字をとると、“Red Orange Yellow Green Blue Indigo Violet”となる。このうち、“in”だけが小文字で示されており、“in”をあらわす“Indigo (藍色)”を見落とし、6色とする説が民衆に受け入れられているとも言える。もちろん、アメリカは典型的な多言語・多民族国家である。そのため、調査の対象がどのような言語文化的背景を持っているかによって、「虹は何色に見えるか」は変わってくるものであろう。留学生やALTなど、

身近な異言語・異文化を背景に持つ方にインタビューすると新たな発見があるかもしれない。このように、色の由来方は、原色である赤・青・黄（3色）のグラデーションによって決まる。「虹」という現実をどのように切り取っているのかを伺うことができる。表1に見るように、ショナ語では、cipswuka（赤、橙、紫）、citema（緑、青、黒）、citená（白、黄、黄緑）の3色とされている。バサ語では、hui（緑、青、紫）、ziza（iの点は波線 赤、橙、黄）の2色とされる。それぞれの色の表現には、日本語の感覚で言うと複数の色が入ってくる。このように、現実をどのように切り取るのかという視点は、言語表現にも表れている。

- (8) 作詞者は増子直純、作曲者は上原子友康である。
- (9) 作詞者は森浩美、作曲者は林田健司である。
- (10) 作詞者は花岡恵、作曲者は橋本祥路である。
- (11) KidsTV123 “The Colors Song” [URL:http://www.youtube.com/watch?v=xPWZu4LDmQM]。
- (12) 1985～1995年に活動。「情熱の薔薇」は、1990年に発売され、当時のTBS系人気ドラマ『はいすくーる落書2』の主題歌として採用されたこともあり、オリコンシングルチャートで1位を獲得している。
- (13) 野原や田のあぜなどに、晩春から初夏にかけて黄色の小花をつける多年草。
- (14) 作詞は康珍化、作曲は佐藤隆。1984年発売。
- (15) 作詞、作曲ともに、つんく。2002年発売。
- (16) もちろん、ここでは性差別を想起させる狙いはなく、あくまでも言語表現とイメージに関する一般論について取り上げているだけである。

【一次資料】

- 相賀徹夫（1987）『国語大辞典 言泉』小学館。
- 赤祖父哲二（1986）『英語イメージ辞典：Dictionary of English and Japanese Imagery』三省堂。
- 赤祖父哲二ほか（2000）『日・中・英語文化辞典』マクミランランゲージハウス。
- 国立教育政策研究所（2011）『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』
- 小西友七（1994）『ジーニアス英和辞典《改訂版》』大修館書店。
- 佐藤尚孝（2001）『英語イディオム由来辞典』三省堂。
- 羽島博愛+フランシス・J・クディラ（1984）『英語発想IMAGE辞典』朝日出版社。
- デラハンティ、ブレンダン（2009）『ロングマン現代英英辞典[5訂版]』ピアソン桐原。
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 外国語活動編』
- 山田忠雄ほか（2005）『新明解国語辞典 第6版』三省堂。
- 山口佳紀（1998）『暮らしのことば語源辞典』講談社。

【二次資料】

- <日本語による文献>
- 青木順子（1999）『異文化コミュニケーション教育：他者とのコミュニケーションを考える教育』溪水社。
- 浅野博（2006）『『英和辞典』の機能の限界』日英言語研究会編『日英語の比較』75-81。三修社。
- 荒木博之（1994）『日本語が見えると英語も見える：新英語教育論』中央公論社。
- アンダーソン、ベネディクト（1997）『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』NTT出版。
- 市河三喜+嶺卓二（1964）『OTHELLO』研究社。
- 岩田裕子+重光由加ら（2013）『概説社会言語学』ひつじ書房。
- 大谷泰照+堀内克明（2002）『社会人のための英語百科』大修館書店。
- 大津由紀雄+窪菌晴夫（2008）『ことばの力を育む』慶應義塾大学出版会。
- 大場建治（2008）『オセロー』研究社。
- カミンズ、ジム（2011）『言語マイノリティを支える教育』慶應義塾出版会。
- 荻谷剛彦『知的複眼思考法：誰でも持っている想像力のスイッチ』講談社。
- 國廣哲彌（1981）『日英語比較講座第3巻：意味と語彙』大修館書店。
- _____（1982）『日英語比較講座第4巻：発想と表現』大修館書店。
- 倉田誠（2011）（編）『映画で学ぶ英語学』くろしお出版。

- 栗原優 (2000) 『英単語この意味を知ればこわくない』講談社.
- 小坂井敏晶 (2002) 『民族という虚構』東京大学出版会.
- 里中哲彦 (2010) 『英語の質問箱：そこが知りたい100のQ & A』中公新書.
- 菅原克也 (2011) 『英語と日本語のあいだ』講談社.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店.
- _____ (1990) 『日本語と外国語』岩波書店.
- 鈴木義里 (2003) 『つくられた日本語, 言語という虚構: 「国語」教育のしてきたこと』右文書院
- 関山健治 (2009) 『英語のしくみ』精興社.
- 関山健治+山田敏弘 (2011) 『日本語から考える! 英語の表現』白水社.
- 田中春美+田中幸子 (1998 [1996]) 『社会言語学への招待: 社会・文化・コミュニケーション』ミネルヴァ書房.
- ドイッチャー, ガイ (2012) 『言語が違えば, 世界も違って見えるわけ』椋田直子 (訳), 合同出版.
- 仲潔 (2009) 「言語観教育の展開: 英語『科』教育にできること」『社会言語学』第9号: 113-138.
- _____ (2011) 「言語観を豊かにするコミュニケーション活動」『岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)』第60巻1号: 103-124.
- _____ (2012) 「〈コミュニケーション能力の育成〉の前提を問う: 強いられる〈積極性/自発性〉」『社会言語学』第12号: 1-19.
- _____ (2013) 「ことばと文化の学び: 『いつか/ずっと役立つ言語文化論』序論」『岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)』第62巻1号: 107-122.
- 西江雅之 (2011) 『新「ことば」の課外授業』白水社.
- 長谷川潔 (2006) 「日英慣用表現の比較: 動物をめぐる慣用句のイミのずれ」日英言語研究会編 『日英語の比較』pp.39-46. 三修社.
- 久泉鶴雄 (2006) 「日英語の視点の相違と表現の相違: 点描」日英言語研究会編 『日英語の比較』pp.111-117. 三修社.
- 本名信行 (2013) 『国際言語としての英語: 文化を越えた伝え合い』富山房インターナショナル.
- 巻下吉夫+瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想とレトリック』研究社.
- 牧野高吉 (2003) 『英語でこう言う日本語の慣用表現』講談社.
- 松本青也 (1994) 『日米文化の特質: 文化変形規則 (CTR) をめぐって』研究社.
- マノ, ジョージ+友繁義典 (2010) 『ネイティブの発想を知る英語イディオム222』三修社.
- _____ (2011) 『English Idioms for More Effective Learning: テーマ別・イディオム総合学習』松柏社.
- ミントン, ティモシー (2012) 『日本人の英語表現』研究社.
- 村田年 (2006) 「コロケーションによる語の意味の分析と記述: 日英語比較の観点から」日英言語研究会編 『日英語の比較』pp.59-66. 三修社.
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.
- 森住衛 (2004) 『単語の文化的意味: friendは「友だち」か』三省堂.
- _____ (2006) 「文法にあらわれた日英語発想法の比較」日英言語研究会 (編) 『日英語の比較』pp. 103-110. 三修社.
- 森山卓郎 (2009) 『国語からはじめる外国語活動』慶應義塾大学出版会.
- 柳瀬和明 (2005) 『「日本語から考える英語表現」の技術: 「言いたいこと」を明確に伝えるための5つの処方箋』講談社.

<英語による文献>

- Varner, Iris and Linda Beamer (1995) *Intercultural communication in the global workplace*. Boston: Irwin McGraw-Hill.
- Lakoff, Joe and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press (渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店.)
- Suzuki, Takao (2001) "WORDS IN CONTEXT" Japan: Kodansha International Ltd.

